

平成22年 5月 1日現在

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2006～2008

課題番号：18500475

研究課題名（和文） 大学運動選手の自我発達に影響する経験の検討

研究課題名（英文） Ego development in university athletes

研究代表者

竹之内 隆志 (TAKENOUCHI TAKASHI)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・准教授

研究者番号：50252284

研究成果の概要：本研究では、大学運動選手の危機経験（迷い悩んだ経験と悩みへの対処行動の経験）の特徴および危機経験と自我発達との関連を検討した。その結果、「競技成績や技術の停滞」「チームメイトとの関係」「怪我」などで多くの選手が悩んでおり、他者に相談しながら悩みに対処していることが明らかになった。また、「競技成績」「将来の職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」での危機経験が自我発達に関連することが明らかになった。さらに、選手が持っている父性・母性が悩みへの対処行動に関連することが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
総計	3,500,000	660,000	4,160,000

研究分野：総合領域

科研費の分科・細目：健康・スポーツ科学

キーワード：大学運動選手，自我発達，危機経験

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 運動選手のパーソナリティ発達についての従来の研究は、パーソナリティ発達のメカニズムを説明する理論を有することなくなされたものが多い。そのため、一定の結論が得られないまま研究自体が減少している。そこで本研究では、Erikson E.H. (1959) の人格変容理論を援用しながら、運動選手のパーソナリティ発達のメカニズムに迫ろうとした。また、このような理論的基盤を有する研究を行うことで、運動選手のパーソナリティについての今後の研究の活性化を意図し

た。

(2) 従来の研究の多くは、ある特定の発達段階にのみ焦点をあてて検討しているものが多く、長期にわたって続く運動選手のパーソナリティ発達過程の全体像は明確にされていない。そこで、発達段階を中学期、高校期、大学期に区分した上で、各期での運動選手のパーソナリティ発達の様相を系統的に検討していくことが必要と考えられる。本研究代表者は、これまでに中学期と高校期の運動選手の自我発達について実証的に検討を加え、

運動選手の自我発達を促進する経験には発達差があることを明らかにしている。こうした発達差をさらに探求し、運動選手の自我発達過程の全体像をより明確にするには大学期の運動選手を対象者とした研究が必要であり、本研究の遂行に至った。

## 2. 研究の目的

(1) 危機ならびに危機への対処行動の経験が人格形成に資するという Erikson E.H. (1959) の人格変容理論を援用し、大学運動選手が運動部活動や日常生活で経験する危機事象ならびに危機に対する対処行動を明らかにする (研究 1)。

(2) 大学運動選手を対象者として、危機経験と自我発達との関連について明らかにする (研究 2)。

(3) 危機に直面した際に、積極的な対処行動を起こすことができる者とそうでない者が存在する。そこで危機に遭遇した際に、積極的な対処行動を起こすことを可能とする要因についても検討する (研究 3)。

## 3. 研究の方法

### (1) 研究 1

大学運動選手を対象者として、運動部活動や日常生活で迷ったり悩んだりした危機事象を自由に記述してもらった。そして、最も悩んだ事象についてどのくらい迷ったり悩んだりしたのかを尋ね、さらにその危機事象に対してどのような対処行動を起こしたのかを自由記述で調査した。また、最終的に迷いや悩みが解決したか否かも調査した。こうした調査から危機経験の特徴を探った。

### (2) 研究 2

大学運動選手を対象者として、12 項目の文章完成テストを実施し自我発達段階を測定した。さらに大学運動選手が危機を経験すると考えられる 13 事象を取り上げ、危機 (個人にとって意味のあるいくつかの可能性を選択しようと迷ったり悩む時期)、探求 (迷いや悩みの解決に向けて探求・努力する時期)、自己投入 (自己の選択に対して関心を示したり努力する時期) の経験を 4 件法で調査した。そして、危機経験と自我発達との関連を検討した。

### (3) 研究 3

危機に対する積極的な対処行動を生起させる要因として、選手が両親との交流の中で内在化してきた父性と母性を仮定した。その理由は、両親との交流は人の発達において最も基礎的なものであり、そうした交流を通して各自が取り入れる父性や母性は、人格的な成長

や思考・行動様式に影響すると指摘されているからである。東大式エゴグラム CP (批判的な親) 尺度は父性の象徴と考えられ、NP (養育的な親) 尺度は母性の象徴と考えられている。そこで、運動部経験のある大学生を対象者としてこれらの尺度を実施し、父性と母性を測定した。運動部活動での問題への積極的な対処行動については、問題事象として「チームメイトとの関係」「指導者との関係」「技術や体力の向上」「勉強や他にやりたいことと運動部活動の両立」を取り上げ、各々について、これまでに迷ったり悩んだ経験 (危機経験) を問い、さらに迷いや悩んだ経験がある場合には「迷いや悩みを解決するためにどのくらい努力したか (対処行動の程度)」を 4 件法で調査した。そして、選手が内在化している父性・母性と対処行動の関連を検討した。

## 4. 研究成果

### (1) 危機ならびに危機への対処行動の特徴 (研究 1 の結果)

大学男子運動選手 237 名ならびに大学女子運動選手 55 名が記述した危機事象を整理・分類した結果、最終的に運動領域では 12 の危機事象が抽出され、日常生活領域では 11 の危機事象が抽出された。多くの選手が経験していた運動領域の危機事象は、「競技成績や技術の停滞」「チームメイトとの関係」「怪我」「指導者との関係」「部活動の継続」であった。

これら 5 つの危機事象について男子運動選手 137 名のデータに基づいて対処行動率 (危機事象に対処行動を起こした選手の割合) と解決率 (危機事象が解決した選手の割合) を算出した結果、「競技成績や技術の停滞」については対処行動率は 82.9% で高く、解決率は 62.9% で中程度であった。「チームメイトとの関係」と「指導者との関係」はともに対人関係に関わる危機事象であるが、対処行動率は各々 47.4% と 50.0% で低く、解決率も各々 52.6% と 37.5% で低かった。「怪我」については対処行動率は 54.5% で低く、解決率は 72.7% で中程度であった。「部活動の継続」では対処行動率と解決率がともに 87.5% で高かった。これらの結果のうち、「競技成績や技術の停滞」において対処行動率が高い点や対人関係に関わる危機事象において対処行動率が低い点は、先行研究 (中込・鈴木, 1985) と一致する。怪我については、対処行動率が低かったが、部位や程度によって対処行動が変わってくると考えられる。また、怪我については、「怪我でプレーできずに、自分の居場所を感じられなくなった」のように単なる身体的な危機ではなく心理的な危機と考えられる記述もあり、怪我を身体的危機として受け止めるかそれとも心理的な危機として受け

止めるかによっても対処行動が異なってくると考えられ、さらに詳細な検討が必要である。「部活動の継続」については解決率が高かったが、これは辞めるか辞めないかという迷いをもった状況で部活動を継続することは難しく、いずれかの選択決定がされやすいことを示していると思われる。

危機事象に対する対処行動の内容を検討した結果、「チームメイトとの関係」「指導者との関係」「部活動の継続」では、“他者に話したり相談したりする”という対処行動が多くとられていた。「競技成績や技術の停滞」と「怪我」では、“他者に話したり相談したりする”という対処行動に加えて、“身体面への働きかけ”という対処行動がとられていた。例えば、「競技成績や技術の停滞」では“友達や指導者に相談した”以外に、“とにかく練習した・自主練をやった”“基礎体力を向上させた”という身体面への働きかけが行われていた。また、「怪我」では“コーチや監督と話した”以外に、“治療やリハビリ、筋トレに専念した”という身体面への働きかけが行われていた。

## (2) 危機経験と自我発達との関連 (研究2の結果)

研究1の結果に基づいて比較的によくの大学運動選手が危機を経験すると考えられる13事象(運動領域の6事象と日常生活領域の7事象)を取り上げた。そして、大学運動選手を対象者として、各事象における危機、探求、自己投入の経験を調査した。また、自我発達段階についても調査した。

女子のデータは少なかつたため除外し、男子136名を分析対象者とした。対象者の各々について自我発達段階を算出し、自我発達段階が低い群(同調的段階以下の群)と自我発達段階が高い群(自己意識的段階以上の群)の2群を形成した。そして、両群の各事象における危機、探求、自己投入の平均を算出し、平均の差を検討した。その結果、危機の平均については、「生き方や価値」「異性の友人」において有意差がみられ、さらに「将来の職業や進路」において平均の差が有意傾向であった。探求の平均については、「競技成績」において両群間に有意差がみられ、「生き方や価値」において平均の差が有意傾向であった。いずれにおいても高自我発達群の方が低自我発達群よりも平均が高かった。自己投入については、どの事象においても両群間に平均の差は認められなかった。

低自我発達群と高自我発達群の平均の差が認められた事象は、危機と探求の分析においてのみ存在していた。つまり、高自我発達群は低自我発達群よりも大学入学後に危機と探求を経験しており、そのことで自我発達を遂げてきたと考えられる。自己投入について

ほどの事象においても両群に差がみられなかったが、これには大学2年生の対象者が多かったことが影響していると考えられる。危機、探求、自己投入は、危機→探求→自己投入という順番で体験されるものであるが、大学2年生という時期では悩んだ末に生じてくる信念をもって努力するといった自己投入には至っておらず、そのため高自我発達群といえども自己投入の得点については低自我発達群と同程度になったのだと考えられる。以上のように、本研究では危機・探求と自我発達との関連が確認されたが、大学3、4年生を増やして検討した場合には、自己投入と自我発達との関連がみられるかもしれない。

次に、両群の平均の差が認められた事象を整理すると、運動領域の「競技成績」ならびに日常生活領域の「将来の職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」であった。これらの事象は自我発達に関連するといえるが、関連が生じたのは、これらの事象が青年期の発達課題に対応しているためと考えられる。青年期の発達課題の一つに性役割の発達があり、Takenouchi et al. (2004) や竹之内ほか (2006) は、青年期では自己の性に合致した性役割を内面化しながら自我発達を遂げると述べている。こうした指摘より、青年期男子の自我発達には男性役割の内面化を促進する経験が重要となると考えられる。本研究では危機事象として「競技成績」を取り上げたが、競技成績の問題への取り組みにおいては達成や競争が経験され、課題志向性が培われる。この達成や競争、課題志向性は、一般に男性に望まれる役割と認知されている(樋口, 1997; 伊藤, 1986)。つまり、競技成績の問題への取り組みは男性役割の内面化を促進し、ひいては自我発達を促進すると思われる。このような背景があつて、「競技成績」が自我発達に関連したと思われる。

「将来の職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」が自我発達に関連したことについては、Erikson E.H. (1973, 1977, 1980) の人間の発達を記した「個体発達図式」から解釈できる。Erikson E.H. は、青年期および成人前期の発達課題として、それぞれ自我同一性の形成と親密性の形成をあげている。そして「将来の職業や進路」および「生き方や価値」は、自我同一性の形成にとって重要な事象である(加藤, 1983; 無藤, 1979)。また、「異性の友人」は親密性の形成に関わる事象である。つまり、「将来の職業や進路」「生き方や価値」「異性の友人」は、本研究の対象者がまさに取り組むべき発達課題であり、そのため自我発達に関連したと思われる。

## (3) 父性・母性と運動部活動での問題への積極的対処行動 (研究3の結果)

運動部経験のある大学生 57 名(男子 38 名, 女子 19 名) を分析対象者として, CP・NP と運動部活動での問題への積極的対処行動との相関係数を求めた。CP は指導者との関係における対処行動と有意な正の相関を示した。NP は指導者との関係における対処行動と有意な正の相関を示し, さらにチームメイトとの関係における対処行動との間で有意傾向を示す正の相関を示した。これらのことから, チームメイトや指導者との関係で悩みが生じた時には, 父性と母性が高いほど悩みの解決に向けた積極的な対処行動がとれるといえる。チームメイトや指導者との関わりは, 運動部活動への適応や運動選手の自我発達に関連する重要な要因であり, 選手が内在化している父性や母性はそうした関わりを促進すると考えられることからその役割は大きいといえる。

NP は対人関係面の対処行動と関連していたが, NP はやさしさや共感といった他者との関係性を促進する側面なのでこの関連は了解可能である。他方, CP は他者を批判するような厳しい側面なので対人関係面の対処行動との関連は予想しにくい, 指導者との関係における対処行動と関連していた。指導者は権威者であり, 権威者との間で生じる問題に対処するには権威に負けない強さや自己主張性が必要である。CP はそうした心性と合致し, そのため CP も指導者との関係における対処行動と関連したのだと思われる。このように CP と NP はともに指導者との関係における対処行動に関連していたが, 両者は異なる機能を果たしていると考えられる。

#### (4) 本研究成果の持つインパクトと今後の課題・展望

運動選手のパーソナリティ発達については, パーソナリティ発達のメカニズムを仮定した理論的な研究が少なく, そのため研究が衰退している。そこで本研究では, Erikson E. H. (1959) の人格変容理論を援用しながら運動選手の自我発達について検討した。その結果, 「運動部活動や日常生活において危機, 探求, 自己投入を経験することで, 運動選手の自我発達が促進される」という自我発達のメカニズムが明らかになり, 運動選手のパーソナリティ発達についての理論構築という点でインパクトを持つ成果が得られた。

また, 竹之内ほか (2006) は中学ならびに高校運動選手の自我発達に関わる事象を明らかにしているが, 本研究では大学男子運動選手の自我発達に関わる事象が明らかになった。これらの結果に基づいて, 中学から大学の学校期ごとに男子運動選手の自我発達に関連する事象を示したものが表 1 であるが, 本研究の遂行によって運動選手の自我発達に関わる事象の発達的变化を明確に出来た

点も理論構築という点でインパクトがある。

表1 男子運動選手の自我発達に関連する事象

	中学選手	高校選手	大学選手
運動領域			
チームメイト	チームメイト	チームメイト	
指導者	指導者	指導者	
競技成績	競技成績	競技成績	競技成績
日常生活領域			
勉強			
生き方や価値			生き方や価値
		職業や進路	職業や進路
			異性の友人

本研究は理論的な観点だけでなく, 指導実践という点でも重要なインパクトを持つ。表 1 に示すように, 学校期ごとに自我発達に関わる要因が異なっていることから, スポーツ選手の人格形成に関しては発達期に応じて指導の観点を変える必要があり, 本研究は発達期に応じた指導への手掛りを与えている。また, 本研究ではスポーツ選手が遭遇する危機と危機への対処行動, そして対処行動の生起に関わる要因を具体的に明らかにした。こうした成果は, スポーツ選手が危機に直面した際の具体的指導の手掛りを与えるものであり, インパクトのある成果といえる。

今後の課題・展望としては第一に, 対象者を拡大した検討が必要である。今回実施した危機経験と自我発達との関連の分析では大学 2 年生の対象者が多かったため, 今後は大学 3, 4 年生の割合を高めた検討を行い, 大学運動選手の危機経験や自我発達についてより一般化可能な特徴を探ることが必要である。また, 女子運動選手を対象者とした分析も必要である。今回は女子のデータが少なく統計的な分析ができなかったが, 自我発達については男子よりも女子の方が早いといわれており, そのため女子運動選手の自我発達に影響する要因は男子運動選手とは異なっている可能性がある。

第二に, より質的な検討が必要である。本研究では, 危機経験や対処行動を自由記述で調査したが, 記述された危機や対処行動が同一であっても, 危機や対処行動の捉え方は個人によって異なると考えられる。こうした危機や対処行動の捉え方も自我発達に関連すると考えられるため, 面接法などを用いて質的データを収集し分析することが必要である。

第三に, 縦断的な研究を行うことが必要である。今回の研究では危機経験と自我発達との関連が明らかになり, 理論的には危機経験が自我発達に影響したと推論可能である。しかし, こうした因果関係を明確にするには, 縦断研究が必要である。

以上のような課題を達成していくことによって、運動選手の自我発達についてのよりよい理解が可能となると考えられる。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 竹之内隆志, 奥田愛子, 大畑美喜子, 大学男子運動選手における危機経験と自我発達との関連, 総合保健体育科学, 33, 41-48, 2010, 査読無
- ② 竹之内隆志, 奥田愛子, 大畑美喜子, 大学運動選手の危機経験と自我発達, 総合保健体育科学, 32, 41-47, 2009, 査読無
- ③ 竹之内隆志, 奥田愛子, 大畑美喜子, 大学運動選手の危機事象, 総合保健体育科学, 31, 13-19, 2008, 査読無

[学会発表] (計5件)

- ① Takenouchi, T., Okuda, A., and Oohata, M. Parental images of significant others and psychological competitive abilities: Gender differences among Japanese athletes. The 12th ISSP World Congress of Sport Psychology. June 20, 2009. Marrakesh, Morocco.
- ② Takenouchi, T., Okuda, A., and Oohata, M. Relationship between crisis experience and ego development in Japanese male athletes. The 12th ISSP World Congress of Sport Psychology. June 18, 2009. Marrakesh, Morocco.

③ Takenouchi, T., Okuda, A., and Oohata, M. Relationships between paternal and maternal images of significant others and the psychological competitive abilities of Japanese athletes. 5th Bangkok ASPASP International Congress on Sport Psychology. December 2, 2007. Bangkok, Thailand.

④ 竹之内隆志, 奥田愛子, 大畑美喜子, 運動選手における重要な他者の父性・母性イメージの機能, 日本スポーツ心理学会第34回大会, 2007年11月24日, 東京

⑤ 竹之内隆志, 運動選手における内在化された父親・母親的な心性の機能, 日本スポーツ心理学会第33回大会, 2006年12月8日, 沖縄

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

竹之内 隆志 (TAKENOUCHI TAKASHI)

名古屋大学・総合保健体育科学センター・准教授

研究者番号: 50252284

##### (2) 研究分担者

( )

研究者番号:

##### (3) 連携研究者

( )

研究者番号: